三条小

互いに学び、ともに高め合う子どもの育成

～学級活動（１）を中心とした、話合い活動の充実を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　在家　正行

１　研究主題について

本校では、教育目標を「自分をのばす」、努力目標を「学ぶ力をのばす」と設定し、教育活動全体を通して、自己のよさや能力をのばす児童の育成を目指している。今年度も学級活動（１）を中心とした話合い活動を通して、一人一人のよさを互いに認め合いながら、進んで表現し、課題を解決する力を身に付けさせたいと考える。そのために、考えをもち、表現する力をつけさせるための土台づくりをし、主体的に参加できるような話合い活動を充実させることで、教育目標の実現を目指したい。

本校の児童は、素直な児童が多く、指示を聞いて行動に移したり、与えられた課題に対して真面目に取り組んだりするよさがある。しかし、自ら課題に気付き、解決に向けて挑戦したり、粘り強く取り組んだりすることに課題がある。また、様々な活動場面で、よい考えをもっていながら、自信をもって話せない姿が見られる。自分のよさ、友達のよさを認め合い、学級での自分の役割を理解し、みんなで何かを成し遂げる成功体験が必要と思われる。そのために、児童が必要感をもって主体的に参加できる話合い活動を充実させることによって、互いに学び、ともに高め合う児童の育成を図っていきたい。

昨年度は、考えをもち表現する力を付けさせる土台づくりとして、各教科の授業で、話合いの場を設定すること、児童が必要感をもって話し合うための環境づくりとして、①各学級で議題箱や学級会コーナーの設置、②話合いを効率的に進めるための司会グループの事前指導、③話合いを深めるための構造化した板書、を意識して研究を進めた。その結果、学級会が円滑に行われるようになり、児童が自分の考えをもち、見通しをもって話合いに参加するようになった。しかし、考えをもつことができても、相手に分かりやすく要点をまとめて話すことができないことが課題として残った。また、児童自らが、学級の生活をよりよくしていこうという視点で議題を見付けることが難しいという反省点も挙げられた。そこで、今年度は、①児童が主体的に聴き合う構えづくり、②集団での合意形成に向けた話し方の習得、③自他のよさや成長に向けた課題を気付かせる振り返りの工夫、により研究主題に迫りたい。

２　研究のねらい

児童が自分の考えをもち、主体的に参加できるように話合い活動を工夫することにより、互いに学び、ともに高め合う子どもが育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

学級活動の話合いにおいて、

① 相手が述べようとしている思いや考えを聴き合わせ、
② 自分の思いや考えを伝える話型・発言の仕方を体験的に学ばせ、
③ 自他のよさや成長に向けた課題に気付くように振り返らせれば、

互いに学び、ともに高め合う子どもを育成できる。

４　研究内容

(1) 主体的に聴き合う構えづくり
　ア　問いをもって聴き、語る活動の工夫
　イ　議題箱や学級活動コーナーの活用
　ウ　議題例の掲示、係活動タイム・ミニ学級会の時間の確保

(2) 集団での合意形成に向けた話し方の習得
　ア　自分の思いや考えを伝える話型・発言の仕方の体験的な学習づくり
　イ　音読タイム、トークトレーニングの実施

(3) 自他のよさや成長に向けた課題に気付かせる振り返りの工夫
　ア　学級会ノート、レベルアップ表の活用
　イ　活動の振り返りの工夫

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者　等
６	３０	第１回授業研究【学級活動（１）】 授業者　４年２組　教諭　久保沢達哉 議題「４の２お手本プロジェクト」
９	１	第２回授業研究【学級活動（１）】 授業者　２年１組　教諭　鎌田まゆ 助言者　八戸市総合教育センター　河村雅庸　所長 議題「夏休みの思い出発表会をしよう」
１２	１	第３回授業研究【学級活動（１）】（要請訪問） 授業者　５年２組　教諭　永田丈治 助言者　八戸市総合教育センター　中村美穂　主任指導主事 議題「６年生に向けて３０日チャレンジ！」

⑵　一般研修

月	日	内容・講師・概要　等
５	１２	ＡＥＤの使い方に関する研修　　講師　八戸市消防署尻内分遣所　署員
６	２	ノート指導に関する研修
９	２１	１人１台端末活用に関する研修（要請訪問）　講師　八戸市総合教育センター 石井一二三　主任指導主事

６　研究の成果

⑴　日常の授業の中で、「話している人に体を向ける」「うなずく」「つぶやく」「よさを見付ける」など、聴く態度を指導することによって、児童らに相手を意識して話を聴く様子が見られるようになった。反応しながら聴くことは「聴いているよ」「理解したよ」という証拠にもなり、話す側も「聴いてもらえる」「認めてもらえる」という安心感から「発表してみよう」という意欲にもつながることが分かった。

⑵　学級会の議題の年間計画を児童と作成して教室に掲示したこと、また、学級目標から生活を振り返ったり、係活動を充実させたりしたことによって、児童らが学級の問題に目を向けるようになった。そのことにより、話合いに意欲的に参加し、主体的に考える児童が増えてきた。

⑶　各学年に応じた話型を指導して、掲示することにより、自分の考えに理由を付けて話したり、相手の意見を尊重したりして、うまく折り合いを付けて合意形成することにつながった。相手の意見を尊重する、理解する、肯定的に受け止めるという態度が育ってきた。

⑷　振り返りの場面では、態度面だけではなく、めあてに沿った発言や合意形成につながる発言など、内容面を記入・発表させたことによって、児童の自己有用感が高まり、個々の成長につながった。自分だけでなく、友達の発言や態度に目を向けさせたことは、よりよい学級づくりにもつながった。

７　研究の課題

⑴　聴く態度が身に付いても、話している内容を理解すること、友達の考えと自分の考えを比べて聴くことがまだ十分ではない。主体的に聴くためには、自分の「問い」「考え」をもたせることが必要である。

⑵　学級会だけで自分の思いや考えを伝える指導をするのでなく、国語の「話す・聞く」単元と関連させて指導するなど、各教科等と連携して資質・能力を育成することが必要である。

⑶　１人１台端末の活用など、情報を活用して主体的に学習を進めていくための資質・能力を身に付けさせるために研修をさらに推進していく必要がある。

（記入者　佐々木寿子）